

進捗状況の概要 【1ページ以内】

本事業は、本学と、本学の長年の協定校であるヤンゴン大学（ミャンマー）、ラオス国立大学（ラオス）、王立プノンペン大学（カンボジア）の3大学が連携して行う3段階の双方向教育プログラムである。すなわち、学部前半の「短期Joint Education Program」、学部後半の「交換による長期留学」、「大学院レベルの交換」の3段階からなり、それぞれで学生間の交流を促し、かつほぼ同数を交換する。目的は、それぞれの言語・文化・社会を深く理解し、日本とミャンマー、ラオス、カンボジアの交流に寄与できる人材の育成である。特に、ミャンマー、ラオス、カンボジア側の人材については、本学からの留学生による支援や、本学での学修を通じ、優れた知日人材を育成することを目標とする。

この目的を達成すべく、採択初年度の平成28年度には、全学の総合戦略会議の下に置かれた教育アドミニストレーション・オフィスに「世界展開力（ASEAN）ワーキング」を設置し、全学的な体制で事業を推進した。また、外部評価委員会の体制を整備し、毎年度末に外部評価を実施した。

平成28～29年度には3段階のプログラムで64名を派遣、44名を受入れ、計画を上回る数字を達成した。

◆学部前半：短期Joint Education Program

短期Joint Education Program では、派遣44名、受入29名を達成した。派遣では、ビルマ語、ラオス語、カンボジア語を学ぶ本学学生が2～3週間の期間、派遣され、各国言語を学んだほか、社会、文化を体験するプログラムに参加した。受入では、期間中に本学でそれぞれの言語を学ぶ日本人学生とタンデム学習を行った他、様々な文化体験や企業見学を行い、知日人材育成の基礎作りを行うことができた。

◆学部後半：交換による長期留学

交換による長期留学では、派遣14名、受入14名を達成した。日本からの派遣学生は、現地で現地語の授業を受講した他、日本語学科における補助や、日本語サポーターとしての活動を通じ、現地で日本語を学ぶ学生の日本語能力向上に貢献することができた。

受入では、「日本語総合・技能」等の授業や教養日本力科目を履修し、日本や日本語についての知識を獲得するとともに、本学学生と密に交流した。また、製造業でのインターンシップや、小学校や地方自治体でのボランティアに参加し、日本理解を深めた。

◆大学院レベルの交換

大学院レベルの交換では、派遣6名、受入1名を達成した。派遣については、研究留学生や日本語教育支援者を派遣し、大学院生の研究を進展させることができた。また、大学院生のリサーチを支援する「大学院Joint Education Program」を利用し、3名の院生を研究活動のため、派遣した。また、受入では、国際日本専攻日本語教育リカレントコースにカンボジア王立プノンペン大学より現職の教員を学生として受け入れ、高度な能力を持った日本語教育人材の育成に寄与した。

◆活動の広報

本学は、上記の活動を要約したパンフレットを日本語、ビルマ語、ラオス語、カンボジア語で作成し、現地での周知に努めるとともに、これらの言語でホームページに逐次、活動を広報している

(<https://tenkaicalm.wordpress.com/>)。また、本学学生の留学記は別途、ウェブサイト上で公開し、交流の参考としている。(<http://www.tufs.ac.jp/student/studyabroad/taiken.html>)

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

平成28年度				平成29年度			
派遣		受入		派遣		受入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
32人	30人	18人	20人	32人	34人	22人	24人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】**◆3段階の交流プログラムにおける教育の質の保証**

3段階のプログラムでは、それぞれ次の形で教育の質を保証し、成果をあげた。

短期Joint Education Program（派遣）は、「短期海外留学」科目として実施し、学生は履修登録の上、留学前・留学後教育を受講、現地での活動を踏まえ2単位を認定された。また、同（受入）では、タンデム学習などでのパフォーマンスを評価し、参加証明書を発行しているほか、留学生日本語教育センター「TUS Short Stay Summer Program」に参加したラオスの学生には、修了証・成績証明書が発行された。

交換による長期留学（派遣）では、派遣先大学において国文、広報等の学科の正規授業を現地語で授業を履修し、全員が単位を取得した。本学はその内容を精査し、本学の単位14単位～31単位に認定した。同（受入）については本学での履修を評価して25単位～30単位を授与、帰国時に英文の成績証明書を付与し、カンボジアとラオスでは、単位互換がなされた。

大学院レベルの交換における本学からの派遣は、綿密な研究計画のもとで実施された。長期派遣の学生は、修士論文研究の評価で、また短期派遣の学生は指導教員の授業の一環として評価されている。受入れの1名は、渡日前入試の受験により厳密に評価され、本学への入学を許可された。

このように、本事業の3段階のプログラムは、いずれも確実な質保証のもので実施された。

◆ミャンマー・ラオス・カンボジアの教育国際化への貢献

本学は、ヤンゴン大学（ミャンマー）、ラオス国立大学（ラオス）、王立プノンペン大学（カンボジア）の関係者と、数度にわたり、「ASEAN+3」の枠組みによる教育の国際化を協議した。具体的には、シラバスの公開、単位互換、成績評価などの課題である。国より様々な困難はあるものの、「ASEAN+3」の枠組みへの理解は進んでおり、本学との共同教育は、各連携大学の教育に変化をもたらしつつある。

たとえば、本学は、本学の学生が連携大学で取得した単位を認定するため、シラバスの公開や授業時間の確認などを数次にわたって連携大学に求め、その結果、概ね情報を入手するに至った。また、本学が授与した単位が連携大学で互換されるよう、交渉している。すでに、ラオス国立大学では日本語科目などの単位互換が可能となった。また、王立プノンペン大学では、本学で取得した単位を、学年ごとに取得すべき単位のパッケージとして単位認定したことが確認された。このような積み重ねにより、世界のスタンダードへの準拠は進みつつあるといえる。

また、こうした活動の一環として、本学はミャンマー、ラオス、カンボジアの教育制度を調査し、その成果を本学のウェブページで公開した。教育の国際化の前提となる知識の共有に役立つ重要な貢献である。

◆日本発信力強化への取組の成果

東南アジア諸国における日本教育・日本語教育を支援し日本の発信力を強化することは、本事業の目的のひとつである。まず、本事業により、本学からの留学生による日本語教育支援が拡大した。すなわち、長期派遣される学部学生は派遣前に日本語教育についての基礎知識を身につけ、派遣先大学において日本語を学ぶ学生に対する日本語教育のサポートを行った。日本語学科での活動のほか、本学の海外オフィス（Global Japan Office Yangon）や、学外でのボランティア活動として行われたケースもある。さらに大学院生は、国際交流基金大学連携日本語パートナーズ派遣プログラムでヤンゴン大学や王立プノンペン大学で活動した（なお、国際交流基金の日本語パートナーズプログラムとは、様々な形で協力している。長期ラオス派遣（10か月：中等教育学校対象）や、短期派遣（平成30年3月、6名）など）。

また、本学への3大学からの3段階の受入は、いずれも知日人材の育成を意図し、成果をあげている。

「短期Joint Education Program」では日本を知る一步を、「交換による長期留学」では本格的な日本理解と日本語獲得を、「大学院レベルの交換」では、現地での日本教育者の育成を目指し、いずれも成果をあげている。とくに、王立プノンペン大学の現職教員の大学院日本語教育リカレントコースへの受入からは、実質的な日本教育力の強化が期待される。

◆言語達成度評価の実施

平成29年度より本学は、全専攻語についてCEFR-J基準による達成度評価を実施した。これにより、本事業で派遣された64名の（1年次在籍18名、2年次在籍25名、3年次在籍9名、4年次在籍6名、大学院在籍6名）の平成29年度末時点での達成度がA1：19名、A2：13名、B1：11名、B2：11名、C1：10名であることが判明し、より正確な達成度把握が可能となった。